

日本語CALLコースウェアの評価に関する研究

尹 楨 助*

目 次

1. 研究の背景と目的
 2. CALLコースウェアの検討
 3. 評価項目の作成
 4. コースウェアの評価に関する調査
 5. 総合的な考察
-

1. 研究の背景と目的

近年、コンピュータの発達と共に、教育や学習における電子メディアの活用が図られ、マルチメディアが教育の内容と方法に大きな影響を及ぼしている。特に、インターネットの普及は学習者に多大な学習の機会と教材を提供し、膨大な数のホームページが様々な種類の教材を競っている。学習ソフト（コースウェア）への関心が高まる中で、その品質や評価に關しては、多くの議論がなされているとはいいがたく、教師や学習者の主観的な判断により、「教材」が選擇されているのが實情であり、キムインソク(1999)も「応用言語學的な觀點から外國語學習方法論が十分反映された評価基準が必要である」と述べている。このような現象は、語學教育においても例外ではなく、英語教育や日本語教育においても同様である。

教師や学習者はどのような基準や視点でコースウェアを選擇しているのであろうか。ただ単に教科内容が含まれてさえいれば適切な教材とは言えないことは明白である。コースウェアには文字・音聲・映（畫）像などの學習素材と共に、學習の流れや提示・解答方法に關わる學習方法がプログラム化されている。「良いコースウェア」の選擇には、素材の適・不適、學習目的・レベルの一致、使いやすさなどの基準が意識的・無意識的に適用されていると思われる。日本語教育用のコースウェアの開発や利用に當たって、評価の内容と方法に關する議論を深める必要がある。

本稿では、日本語教育における望ましい學習者用評価項目を作成し、韓國人日本語學習者によるネットワーク型日本語教育用のコースウェアの評価を行うことによって、評価用

* 廣島大學大學院教育學研究科博士課程後期

紙の信頼性を分析し、コースウェアの評価を行うことと、望ましいコースウェアのあり方と学習者のコースウェアに対する期待について明確にすることを目的とする。

以上のように、本研究を通して益々多様化する日本語CALLの促進に向けた改善の一步とした。

2. CALLコースウェアの検討

本章ではコースウェアに関する先行研究を、全般的な教育用、外国語（特に英語）教育用、及び日本語教育用の3点から概観し、本研究における評価項目の設定の基礎資料とする。コースウェアとは、知識内容となる学習素材とその学習方法（提示、解答、KRなど）を一体化した学習ソフトであり、本稿では単一のメディア（文字、音聲、映像、画像）による素材の提示と区別する。CALLとは、Computer Assisted Language Learning（コンピュータ支援の言語学習）であり、日本語教育・学習を目的とする場合に、日本語CALLと呼ばれる。

2.1 教育用コースウェアの評価研究

教育用コースウェアの評価研究には、(Alessi&Trollip 1985、Bullough 1987、キムヨンス 1990、Merill 1994、北神・井上 2000 など)があり、コースウェアの評価研究においては長い歴史をもっている。それぞれの研究は、特定の教科科目に限らない評価項目を設定しており、総合的な評価方法であるといえる。北神・井上(2000)は、「日本において教育ソフトの評価に関する研究はあまり見受けられない」(p.184)と述べ、「マルチメディア型教育ソフトをユーザが心理的な意味空間においてどのようにとらえているかを明らかにするとともに、それをもとに、そのような教育ソフトを選択するときに、ユーザの視点からみてわかりやすいソフトの心理的な分類や選択基準を明示すること」(p.184)として、大學生に対する自由記述の調査から、統計的な手法を用いて「目的志向性」「興味誘発性」「教育課題性」「制御容易性」の四つの因子を抽出した。この研究は、評価基準・項目の設定において客観性が高く、基本的な視点となり得ると言える。しかし、抽象化された評価項目の文言が、外国語学習者あるいは日本語学習者が答えるのに適切であるかどうかの検討が必要である。

2.2 外国語教育用コースウェアの評価研究

外国語教育においては、主に英語教育用コースウェアの評価研究が多く見受けられる。キムジュン(1999)は、英語教育コースウェアにおける評価研究を行い、方向性を提示している。しかし、具体的な評価項目までは至っていない。また、キムインソク(1999)は、外国語教育用ということ念頭におき、①教科課程的な側面、②教育用ソフトウェアの評価に使われながら外国語教育用の評価点検表にも含めるべき事項、③外国語教育用ソフトウェア評価の本質的な評価項目の三つに分けて評価点検表を作成した。この研究を受け継いで、キム(2000)は、学習者側の評価だけでなく、相互作用的な観点から教師側の評価も必要であるとし、さらにこれまでの研究では議論されていなかった教師側の「教師側のソフトウェア評価」を追加している。

このように外国語教育、とりわけ英語教育では、従来的一般教育ソフトウェアの評価に外国語教育の要素と教師側の要素を取り入れた評価方法の研究がなされている。

2.3 日本語教育用コースウェアの評価研究

日本語教育においては、開発教材の評価を目的として設けられた評価項目（松見ほか2002、水町ほか2003）などがあるが、開発教材に限定された評価項目が多く、一般化できない問題がある。その他に、日本語教育コースウェア一般に関わる研究として鄭(2003)などがある。

鄭(2003)は、従来教育用・外国語教育用コースウェアを概観し、マルチメディア日本語教材の特色を十分に考慮した評価基準とは言い難いと述べている。そして、パッケージ型（CD-ROM）とネットワーク型（インターネット）の二種類に分け、さらにそれぞれ＜教師・研究者・開発者用評価項目＞（以下「教師用」と略す）と＜学習者用評価項目＞（以下「学習者用」と略す）に分けている。これらの評価項目はそれぞれ詳細で具体的であり、さらに日本語教育的な評価項目を取り入れて、従来研究の問題点を補っている。一方、「学習者用」は、「教師用」を学習者が評価できるようにさらに単純化したものであり、「記述式」を除くと18項目である。しかし、CALLが学習者中心であるにもかかわらず、学習者用の評価項目は教師用に比べ、充實しているとは言い難い。

2.4 先行研究のまとめ

以上の研究からそれぞれ代表的な研究について、「教師用」・「学習者用」の質問項目数を比較すると＜表1＞となる。

<表1> 「教師用」・「学習者用」の質問項目数の比較

分類	北神・井上(2000)		鄭(2003)		キム(2000)	
	教師用	学習者用	教師用	学習者用	教師用	学習者用
1	0	10	22	7	15	6
2	0	11	8	3	6	2
3	0	5	3	2	10	1
4	0	4	5	5	1	1
小計	0	30	38	17	32	19
その他	0	0	56	1	38	0
合計	0	30	94	18	70	10

注:分類の1～4は、北神・井上(2000)の4因子を表す。

<表1>から、従来の外国語や日本語の評価研究では、教師の視点からの項目に比べ、学習者用の評価項目が少ない。つまり、「教師用」は「学習者用」より充実しており、学習者の視点からの評価項目を充実させる必要があることがわかる。

3. 評価項目の作成

本研究では、「学習者用」の整備が必要と判断し、評価項目を作成し、その項目を用いて、日本語CALL教材を調査することにより、評価の内容と方法を検討した。

3.1 検討課題

先行研究の考察から、「教育一般にまたがる評価の視点を持ちつつ、外国語教育の要素をどのように組み込むか、更に、日本語教育特有の問題をどのように評価項目に反映させるか。」という課題が考えられる。

これは、本研究における課題であり、日本語CALLコースウェアを評価するに当たって重点をおくべき箇所でもある。

本研究では、学習者が行う評価項目の作成を第1の目的とした。前にも述べたようにCALLが持つ意味は学習者中心にあるからである。したがって、学習者用の一般的な項目として北神・井上(2000)を基本とし、外国語教育や日本語教育用の項目を当てはめ、さらに日本語教育的な側面とメディアの側面などを盛り込めば、最も望ましい日本語の「学習者用評価項目」が抽出できると思われる。

3.2 課題解決の方法及び手順

本研究では、上記の検討課題の解決策として以下のような方法を用いた。

- ① 北神・井上(2000)から、4因子と30項目を採用する。
 - ② 鄭(2003)とキム(2000)の学習者用評価項目を上記4因子に当てはめる。
 - ③ 鄭(2003)とキム(2000)の教師用評価項目を再検討し、4因子に当てはめることができる項目を抽出する。
 - ④ 特に、③の過程で、日本語学習に不可欠であると思われる「文字」の扱いに関する事項を抽出し、4因子に位置づけた。
例) 漢字は日本漢字が使われているか。
漢字のふりがなは適切であり、ふりがなを表示する機能がある。
 - ⑤ 学習者中心にわかりやすい文言に変える。
例えば「学習者」は「自分」、「コースウェア」は「学習ソフト」、「インタラクショ
- ン」は「正誤判定・評価」、「フィードバック」は「反応」、「目的志向性」は「グループ1」というふうに変える。
- ⑥ 内容の類似した項目はひとつにする。
 - ⑦ 一つの質問項目に複数の質問項目が含まれている場合は、それぞれの項目に分ける。
- 以上の手順により評価用紙を作成した。(＜資料＞を参照)

4. コースウェアの評価に関する調査

上記の評価用紙を用いて、情報通信ネットワークで提供されている日本語CALL教材(コースウェア)、即ち日本語の学習ソフトの評価に関する調査を実施した。

4.1 評価対象のサイト

日本語CALL関係の文献・検索エンジン(検索語^{注1}の入力)・リンク(ホームページにあるリンク先から辿っていく)などから全108サイトを収集した。jpで終わる学習サイトが58、krで終わる学習サイトが17、comで終わる学習サイトが33である。^{注2}

しかし、上記の学習サイトは、様々な種類があり、その他にもいくつかの学習サイトが存在するだろうし、またその数は把握しきれない。そのため、その全体を把握することは物理的に極めて難しく、限定した形での調査及び評価が不可避である。そこで、本調査及び評価に

においては、コースウェア（学習サイト）とは知識内容となる学習素材を、その学習方法（提示・解答・KRなど）と一体化した学習ソフトであり、単一のメディア（文字・音聲・画像）による素材の提示と区別し、本研究におけるコースウェアの対象とした。また、マルチメディアとコンピュータのメリットを十分生かした学習サイトは最も評価価値があると思われる、以下のサイトに限定した。

- ① 必ずインタラクションが提供される学習サイトであること。
- ② メディアは、＜テキスト＋音聲付動画＞、又は＜テキスト＋音聲＞の学習サイトであること。

また、調査実施上の問題として以下の理由でさらに学習サイトを限定した。

- ③ 無料の学習サイトであること。
多数の調査協力者が評価を行うために、ランダムで有料のサイトを評価対象に入れるのは経済的に負担がかかることから、本研究では無料の学習サイトのみを扱う。
- ④ Windows版であること

本研究においては、韓国人日本語学習者を評価者として考えており、韓国または韓国人に最も普及しているWindows版の学習サイトを扱う。

以上の結果、jpで終わる学習サイトは7、krで終わる学習サイトは2、comで終わる学習サイト3で、全部で12の学習サイトとなった。

その12の学習サイトの特徴は＜表2＞のとおりである。

＜表2＞一次評価によるサイトの特徴

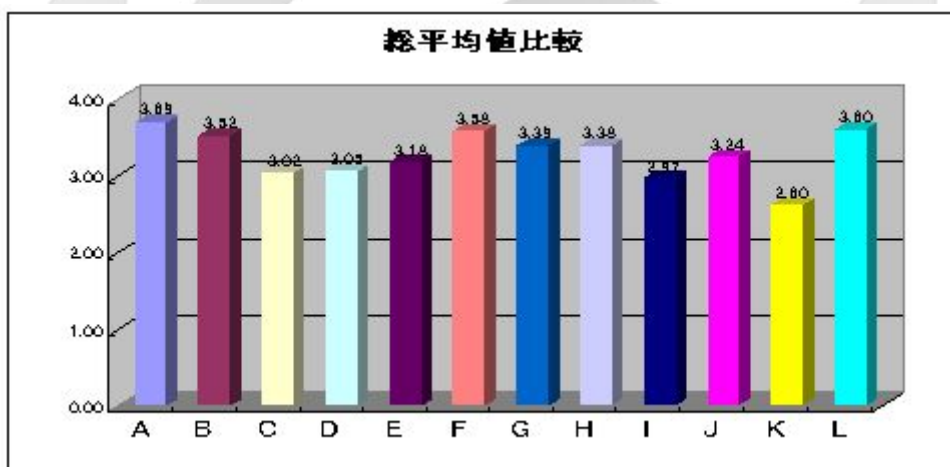
	A	B	C	D	E	F
使用言語	日・韓 中・英	日・韓・中 タイ・英 ポ	日・英	日	日	日・英
対象レベル	中	初	初・中・上	不明	中・上・超	不明
学習技能	聞く・読む	聞く・読む	聞く	聞く・読む	聞く・読む	聞く・読む
学習目標	聴解	試験	聴解	総合	聴解	聴解
メディア	映像・動画 画像・音聲 テキスト	動画・画像 音聲 テキスト	音聲 テキスト	画像・音聲 テキスト	映像・音聲 テキスト	音聲 テキスト
国コード	JP	JP	JP	JP	JP	JP
運営主体	日本の大学	日本の政府	日本の大学	日本の大学	日本の大学	日本の日本語学校
指導理論	有り	不明	不明	不明	不明	不明
	A	B	C	D	E	F
	G	H	I	J	K	L
使用言語	日	日	日・英・韓	韓	英	日・英・韓
対象レベル	不明	不明	初・中・上	不明	不明	初
学習技能	読む	読む	聞く・読む	読む	読む	聞く・読む
学習目標	総合	文化	総合	文字・文法	総合	総合
メディア	音聲 テキスト	動画・音聲 画像	映像・動画 画像・音聲 テキスト	動画・音聲 テキスト	音聲 テキスト	映像・動画 画像・音聲 テキスト
国コード	JP	JP	KR	KR	COM	COM
運営主体	日本の大学	日本の大学	韓国の大学	不明	個人	韓国の大学
指導理論	不明	不明	不明	不明	不明	不明

注:(1)「使用言語」の表記

- 「日」→「日本語」、「中」→「中國語」、「韓」→「韓國語」、「英」→「英語」、「タ」→「タイ語」
 「イ」→「イタリア語」、「ポ」→「ポルトガル語」
 (2) 「対象レベル」の表記
 「初」→「初級」、「中」→「中級」、「上」→「上級」、「超」→「超級」

4.2 学習サイトの評価に関する調査方法

12のサイトをそれぞれ4つずつ、ランダムに三つのグループにわけた。本研究の評価用紙（日本語版と韓国語版）を用いて、一人当たり4つのサイトを評価するよう依頼した。つまり、一つのサイトを10人が評価することになり、全部で30人に依頼をした。評価者は、いずれも韓国人日本語学習者で、男性16人、女性14人であった。また、年齢の平均は25歳で、日本語学習暦の平均は4年であった。30人の評価者による評価結果は<図1>である。



<図1>30人の評価者による総平均値比較

しかし、12のサイトは初級から超級までの幅広いレベルになっており、各評価者の学習レベルに合うサイトを選んで評価した訳ではない。本研究では上記30人の内、中級日本語学習者^{注3}（本調査では、学習歴3年以上～7年未満）と思われる18人の評価結果により、各因子別に検討した。この18名の評価者は、男性10人、女性8人で、年齢の平均は約25歳で、日本語学習歴の平均は約3年7ヶ月であった。評価用紙は、それぞれMS-WORD形式のファイルと印刷物の二種類を用意した。評価用紙の回収方法としては、評価者のメールにMS-WORD形式のファイルを添付し、送り返すようお願いをした。

4.3 評価用紙の信頼性分析

今回は、以上のデータ（前節の4. 2）をもとに、評価用紙の信頼性分析を行う必要がある。というのは、信頼性は測定の精度に関する概念であり、尺度の「よさ」を考えるうえでのひとつの観点である（鎌原ほか編著 2005）ことから、評価用紙を作ったうえで、当該の評価項目が信頼できるものかどうかを測定することである。本稿における分析対象は3章で作った評価項目（資料を参照）で行った評価結果をもとに分析を行った。

分析対象は、評価用紙の各項目について、被験者の回答を得点化し、被験者×ソフトを変動とし（各評定値が30名×12ソフト、のべ360名分）、SPSSソフトを使った。信頼性の検討においては、よく使われている（小塩 2005）「 α 係数」の算出方法を用いた。その結果、「目的志向性 (0.923)」「興味誘発性(0.889)」「教育課題性(0.792)」「制御容易性 (0.918)」の α 係数が得られた。

そこで、 α 係数がある程度の数値（.70や.80）以上であれば、尺度の「内的整合性が高い」と判断される（小塩 2005）ことから、本評価用紙は「内的整合性が高い」、言い換えれば信頼性のある評価用紙であることが検証された。

4.4 評価調査の結果と分析

以上の調査方法で以下のような分析方法を用いた。

①各因子におけるサイトの平均値をもとに平均値を出す。

<表 3> 目的志向性

サイト	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	平均値
平均値	3.61	3.49	2.97	3.22	3.29	3.63	3.45	3.40	3.19	3.43	2.70	3.82	3.35

<表 4> 興味誘発性

サイト	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	平均値
平均値	3.45	3.44	2.62	3.12	2.59	3.18	3.22	3.48	2.85	2.68	2.12	3.77	3.04

<表 5> 教育課題性

サイト	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	平均値
平均値	3.88	3.48	3.13	3.13	2.90	3.28	3.16	2.80	3.45	3.40	2.75	3.77	3.26

<表 6> 制御容易性

サイト	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	平均値
平均値	3.82	3.74	2.82	3.11	3.11	3.89	3.60	3.61	2.48	3.62	2.06	3.86	3.31

②因子ごとの平均値以上のサイトであれば、高評価サイト（相対的）として抽出する。そ

れは以下のとおりである。

<目的志向性>A・B・F・G・H・J・L <教育課題性>A・B・F・I・J・L

<興味誘発性>A・B・D・F・G・H・L <制御容易性>A・B・F・G・H・J・L

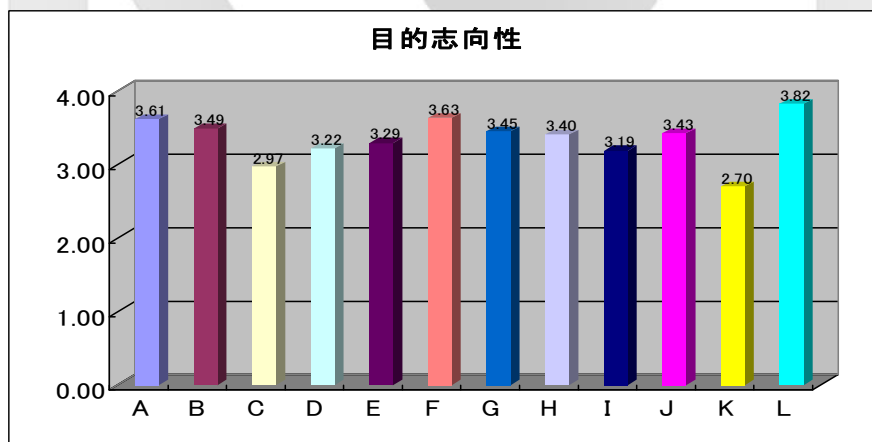
③上記の②で抽出されたサイトを分析対象とし、質問項目ごとの平均値が因子ごとのサイトの平均値以上であれば、当該サイトの高評価項目（相対的）とした。

④各項目ごとに上記③の高評価項目を有するサイトが過半数であれば、本研究における高評価項目（相対的）とし、高評価サイトの特徴として位置づける。（<表7～10>を参照）

以上のような手順を用いて、以下においては因子ごとに分析を行った。また、各サイトの総平均値と自由記述の内容を紹介し、内容を分析した。

（1）目的志向性

目的志向性においては、<図2>でわかるようにLの平均値が最も高く、Kが一番低かった。その理由として、Lのサイトは学習レベルや学習者の目的に応じてメニューが設定されている反面、Kは体系的な内容構成になっておらず、学習素材を集めたサイトであるため、それぞれの平均値に差が見られたと思われる。合計平均値の3.35以上の平均値が出された学習サイトは7つ（A・B・F・G・H・J・L）であり、この学習サイトは目的志向性が高いといえる。



<図2>目的志向性

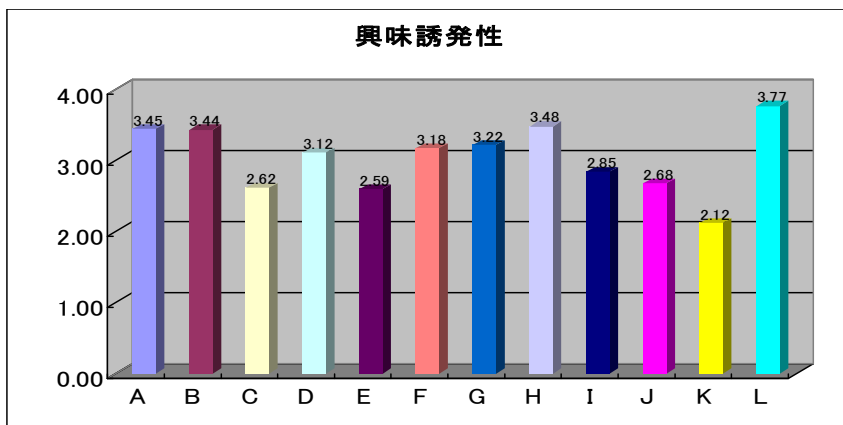
また、この7つの学習サイトにおける<表3>のそれぞれの平均値以上の項目ごとの平均値であった評価項目は<表7>のとおりであり、高評価学習サイトにおける「目的志向性」の特徴であるといえる。

<表 7> 目的志向性における高評価の評価項目

番号	質 問	A	B	F	G	H	J	L	合計
1	学習レベルの設定は適切である。	1	1	1		1	1	1	6
2	学習した内容はすぐ使える。		1	1	1	1	1		5
3	内容構成にまとまりがある。	1	1	1		1	1	1	6
4	文字の学習に役に立つ。			1	1	1	1	1	5
5	日本語の学習の説明や提示は役に立つ。				1	1	1	1	4
6	例文は役に立つ。	1	1	1	1	1		1	6
13	学習内容は適切である。	1	1		1		1	1	5
14	学習方法は適切である。		1	1	1	1	1	1	6
15	操作説明は適切である。		1	1		1	1	1	5
16	学習しやすいような構成である。	1	1	1		1	1	1	6
17	自分にいい影響を与える。	1	1	1	1	1	1	1	7
18	自分に必要な部分を選択して学習できる。			1	1		1	1	4
21	他の画面や他の機能への移動が自由にできる。		1	1	1		1	1	5
22	メニューの利用が容易である。	1	1	1	1	1	1	1	7
25	学習中に不安感がない。	1	1	1	1	1	1		6
27	全体が把握しにくい。	1	1			1		1	4
28	無駄なものが多く含まれている。	1	1	1			1	1	5

(2) 興味誘発性

興味誘発性においては、<図 3>でわかるようにLの平均値が最も高く、Kが一番低かった。その理由として、Lのサイトはマルチメディア的な要素を十分活用し、ゲーム的な感覚で学習ができるようになっている反面、Kは文字と音聲に偏っており、退屈さを感じさせたと思われる。合計平均値の3.04以上の平均値が出された学習サイトは7つ（A・B・D・F・G・H・L）であり、この学習サイトは興味誘発性が高いといえる。



<図 3> 興味誘発性

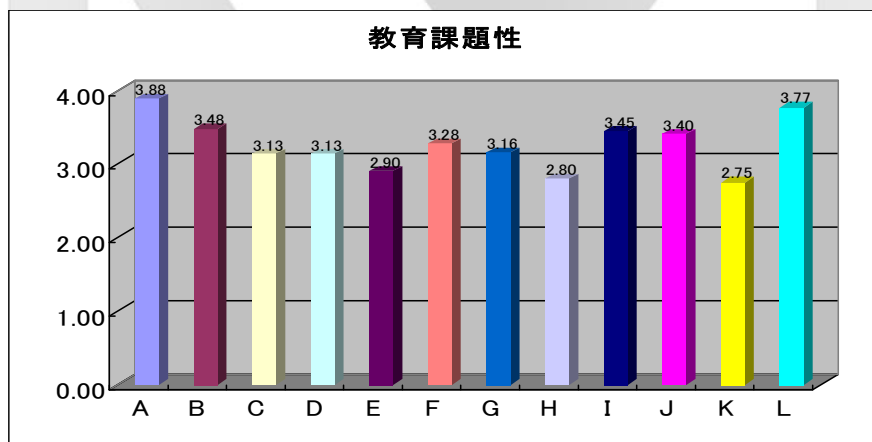
また、この7つの学習サイトにおける<表4>のそれぞれの平均値以上の項目ごとの平均値であった評価項目は<表8>のとおりであり、高評価学習サイトにおける「興味誘発性」の特徴であるといえる。

<表8>興味誘発性における高評価の評価項目

番号	質 問	A	B	D	F	G	H	L	合計
1	全体的におもしろい。	1	1	1	1	1	1		6
2	日本語学習を楽しくしている要素が入っている。		1	1	1	1	1	1	6
3	親しみやすい内容になっている。		1	1	1	1	1	1	6
5	なじみやすい学習のしかたである。	1	1		1		1	1	5
6	興味を持たせる内容である。	1		1	1	1	1	1	6

(3) 教育課題性

教育課題性においては、<図4>でわかるようにAの平均値が最も高く、Kが一番低かった。その理由として、Aは指導理論に基づき、学習内容が体系的に構成されている反面、Kは素材としての提供にとどまっているため、それぞれの平均値に差が見られたと思われる。合計平均値の3.26以上の平均値が出された学習サイトは6つ（A・B・F・I・J・L）であり、この学習サイトは教育課題性が高いといえる。



<図4>教育課題性

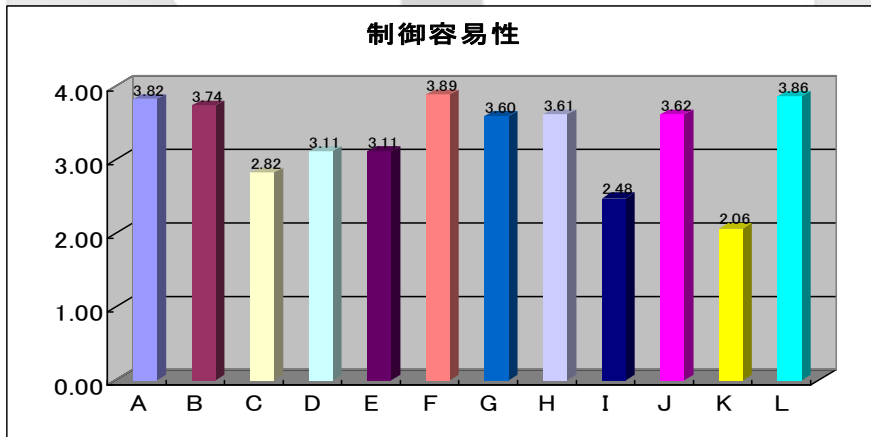
また、この6つの学習サイトにおける<表5>のそれぞれの平均値以上の項目ごとの平均値であった評価項目は<表9>のとおりであり、高評価学習サイトにおける「教育課題性」の特徴であるといえる。

<表 9>教育課題性における高評価の評価項目

番号	質問	A	B	F	I	J	L	合計
5	正解に対する反応は適切である。	1	1	1		1	1	5
7	漢字の読み方がふりがなとして適切に示されている。	1		1	1	1	1	5
8	文字の表記法は適切である。	1	1	1	1	1	1	6
9	音聲による学習ができる。	1	1	1			1	4
10	母語で読むことができる。	1	1	1	1	1		5

(4) 制御容易性

制御容易性においては、<図 5>でわかるようにFの平均値が最も高く、Kが一番低かった。その理由として、Fのサイトは単純な構成になっているため、操作が容易である。しかしKも単純な構成になっており、一見操作などが容易であると考えがちだが、テキスト自体が英語になっており、韓国人日本語学習者にとっては、難しく思われたであろう。したがって、それぞれの平均値の差が見られたと思われる。合計平均値の3.31以上の平均値が出された学習サイトは7つ（A・B・F・G・H・J・L）であり、この学習サイトは制御容易性が高いといえる。



<図 5>制御容易性

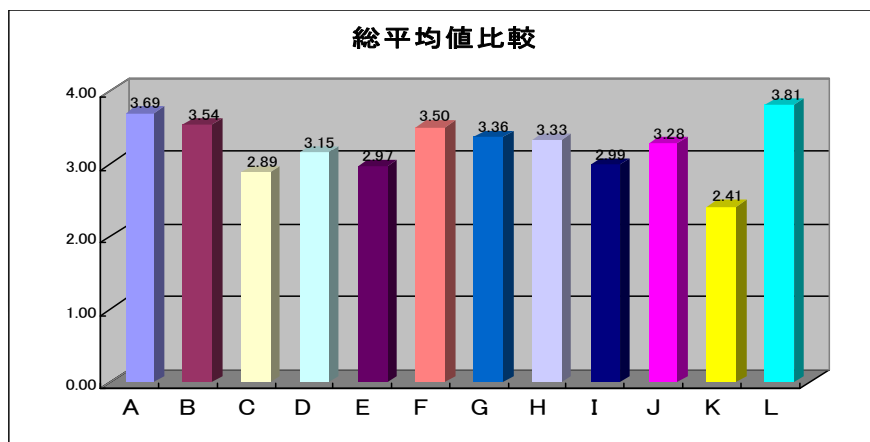
また、この7つの学習サイトにおける<表 6>のそれぞれの平均値以上の項目ごとの平均値であった評価項目は<表10>のとおりであり、高評価学習サイトにおける「制御容易性」の特徴であるといえる。

<表10>制御容易性における高評価の評価項目

番号	質 問	A	B	F	G	H	J	L	合計
1	学習のやりかたが簡単である。			1	1	1	1	1	5
2	選択ボタンの使い方は簡単である。	1	1	1	1	1	1	1	7
3	使いやすい。	1	1	1	1	1	1	1	7
4	記号や用語がわかりやすい。		1		1	1	1	1	5
11	プログラムが突然止まるなどの誤差動がない。	1		1	1	1	1		5

(5) 総平均値による結果

総平均値による結果として<図6>でわかるように、Lが最も高く、Kが最も低い評価値という結果となった。また、平均値3.5以上は高評価であると考えられ、これに該当するA・B・F・Lは、高評価の学習サイトである。



<図6>総平均値比較

(6) 自由記述

「自由記述」においては、多くの意見が寄せられたが、本稿において全ての意見を概観することはせず、高評価の学習サイトLと、低評価の学習サイトKの例をもとに、学習者の期待と要望について考察した。

<表11>短所

L	K
入會してすぐ使えない。	英語と日本語が混ざっていて複雑。
作られて間もないせいか資料が少ない。	英語になっていて使いにくい。
画面の色など全体的にかたい。	日本語学習よりは英語学習のためのサイトのような感じがした。
メニューの構成と移動が容易ではない。	体系的な構成に欠けている。
メニューに内容が全然ないところもある。	

以上の<表11>のように、Lでは教材の未完成からくる問題と画面の構成に関する短所が指摘された反面、Kでは主に母語による学習が不可能という短所が指摘された。したがって、母語による学習は教材を作る上で、とても重要であることが言えるし、学習者は画面の構成に敏感であることがわかる。

<表12>長所

L	K
初級学習者に適切な教材である。	色々な日本語関係のサイトがリンクされている。
内容がわかりやすくなっており、学習しやすい。	英語を母語とする学習者には役立つと思う。
日本語に関するものだけでなく、実用的な情報が多く含まれている。	色々な情報が得られる。
適切な構成とデザインで視覚的な効果が目立つ。	色々な形態の学習方法とメニュー
動画像を利用した興味誘発。	世界各国の日本語事情についてわかる。

以上の<表12>の長所からみると、Lでは主に教材の使いやすさと内容の分かりやすさが、Kでは情報量の豊富さが主に評価され、長所として学習者は注目していることがわかる。

<表13>その他の意見

L	K
画面の色や文字のサイズなどについてもっと工夫をし、学習者に興味を起こさせてほしい。	非英語圏の学習者の日本語学習には不適切だと思う。
有料でなければ、入會手続きを簡素化する必要があると思う。	
サイトの内容を把握するためには入會をしなければならず、正會員になるまで時間がかかる。	

その他の意見として、<表13>でわかるように、高評価のLでは入會手続きの簡素化が主に指摘され、低評価のKでは母語による学習が指摘されている。以上の自由記述から考えられるのは、①教材の使いやすさ②内容の分かりやすさ③多言語支援④情報量の豊富さ⑤手続きの簡便さである。またこれは、教材の作成および評価において参考すべきことにもなるだろう。

5. 総合的な考察

以上のような結果と分析から、今回の評価調査で高い平均値が得られた学習サイトの特徴が抽出でき、それらは望ましい学習サイトの要点にもなりうる。また、「目的志向性」「興味誘発性」「教育課題性」「制御容易性」で得られた高評価項目の中で、それぞれ過半数のサイトで指摘された項目は、より注目度が高いと考えられる。それらは<表14>のように、目的志向性（17項目）興味誘発性（5項目）教育課題性（5項目）制御容易性（5項目）である。

<表14>注目度の高い評価項目

目的志向性	興味誘発性	教育課題性	制御容易性
学習レベルの設定は適切である	全体的におもしろい	正解に対する反応は適切である	学習のやりかたが簡単である
学習した内容はすぐ使える	日本語学習を楽しくしている要素が入っている	漢字の読み方がふりがなとして適切に示されている	選択ボタンの使い方は簡単である
内容構成にまとまりがある	親しみやすい内容になっている	文字の表記法は適切である	使いやすい
文字の学習に役に立つ	なじみやすい学習のしかたである	音聲による学習ができる	記号や用語がわかりやすい
日本語の学習の説明や提示は役に立つ	興味を持たせる内容である	母語で読むことができる	プログラムが突然止まるなどの誤作動がない
例文は役に立つ			
学習内容は適切である			
学習方法は適切である			
操作説明は適切である			
学習しやすいような構成になっている			
自分にいい影響を与える			
自分に必要な部分を選択して学習できる			
他の画面や他の機能への移動が自由にできる			
メニューの利用が容易である			
学習中に不安感がない			
全体が把握しにくい (逆転項目)			
無駄なものが多く含まれている (逆転項目)			

さらにこの特徴は、今後ネットワーク型日本語CALLコースウェアを評価する上で、基本的な基準になるとと思われる。

本研究では、全般的な教育・外国語教育・日本語教育の先行研究を用いて日本語CALLコースウェアの学習者評価項目を作成し、韓国人日本語学習者による調査を行い、評価項目の信頼性を検証し、望ましいコースウェアのあり方について検討した。また、学習者がコースウェアに対して、どのような期待を持っているかということを明らかにした。さらに、本研究で作成した評価項目を通してコースウェアの特徴を判断する資料となり得ることを示した。以上が、本研究における意義である。付け加えていうと、本研究における評価研究は、日本語学習ソフトの基本的・一般的な尺度を提示することを目的としており、個別の学習ソフトを綿密に評価するためには、一般的な項目をもとに、評価目的に応じて更なる工夫が必要となるだろう。

最後に今後の課題として残るのは、本研究で作成した評価項目をもとに「教師・研究

者・開発者」の評価項目を作成し、より包括的な評価を行うことである。今後においては、以上の課題を解決することによって、より進んだ日本語CALL研究の改善の一步としたい。

注1：検索語は、「日本語」「日本」「CALL」「CAI」「コースウェア」「学習」などの検索語をそれぞれ単独で入力したり、二重検索をするなどの方法を用いた。

注2：従来の研究においては、国名で分類していたが、本研究ではサイトの最後につく国コードで分類する。というのは、大学機関や企業で開発された場合は問題ないが、個人の場合はどこを據点にして開発したかなど非常に紛らわしいからである。例えば、韓国人が日本でアメリカのサイトを使って開発した場合などがその一例であろう。

注3：本研究における学習サイトは、学習レベルが設定されているサイトがある反面、設定されていないサイトがほとんどである。また、評価者のレベルも様々であった。しかし今回の調査では、結果的に中級レベルの学習者が最も多く、レベルを焦点化することが、調査の信頼性を高めると考えたために、中級日本語学習者を分析対象とした。

注4：逆転項目として、「無駄なことが多く含まれていない」と変えられ、評価値においても、「2」の場合は「4」、「1」の場合は「5」に換算した。

【参考文献】

- Allessi&Trollip(1985). Computer-Based instruction: Methods and development. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall, Inc.
- Bullough, R. & Beatty, L.(1987). *Classroom Application of Micro-Computers*, Columbus, Ohio: Merrill Publishing Company.
- Hubbard. P. L. (1987). Language Teaching Approaches, the Evaluation of CALL Software, and Design Implications. In Smith, W. F. (ed.), *Modern Media in Foreign Language Education : Theory and Implementation*. Lincolnwood, IL : NTC.
- Merill, P.(1994). Applying component display theory to the design of courseware. In Jonassen, D, H. (ed.), *New Directions in Educational Technology*, New York, New York : Springer-Verlag.
- (*)キムインソク(1999)「外国語教育用ソフトウェア評価の理論と実際」『韓国マルチメディア言語教育學會』2(2), 韓国マルチメディア言語教育學會, pp.104-135.
- (*)キムヨンス(1990)「韓国CAIコースウェアに関する検討・評価研究」『教育工学研究』6(1), 韓国教育工学會, pp.115-151.
- (*)キムクァンミン(2000)「英語教育用CALLソフトウェアの統合型評価点検表の構築」『英

『言語科学』4(1), 韓国英語言語科学会, pp.143-162.

(*)キムジュウン(1999)「英語教育のためのCD-ROMコースウェア評価研究」『英語言語科学』2, 韓国英語言語科学会, pp.102-107.

(*)ソンジョンベ(1999)「外国語教育用ソフトウェア評価の理論的背景と応用」キムインソク編著『マルチメディア言語学習の理論と実際』博文閣

小塩真司(2005)『SPSSとAmosによる心理・調査データ解析』東京図書

鎌原雅彦ほか編著(2005)『心理学マニュアル質問紙法』北大路書房

北神慎司・井上智義(2000)「マルチメディア型教育ソフトの評価に対するひとつのアプローチ

」『日本教育工学雑誌』24(増刊号), 日本教育工学会, pp.183-188.

鄭起永(2003)『マルチメディアと日本語教育—その理論的背景と教材評価』凡人社

松見法男ほか(2002)「「バーチャル・ユニバーシティ」プロジェクトにおけるネットワーク利用

授業に対する受講生の印象評定」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第二部(51), 広島大学大学院教育学研究科, pp.217-224.

水町伊佐男ほか(2003)「日本語CALL聴解練習用教材の開発」『広島大学日本語教育研究』13, 広島大学大学院教育学研究科日本語教育講座, pp.15-21.

水町伊佐男ほか(2003)「日本語CALL聴解練習用コースウェアの開発と評価」

『日本教育工学会雑誌』27(3), 日本教育工学会, pp.250-258

注：上記の引用文献の(*)は、韓国語の論文から、題目等を日本語に筆者が翻訳したものである。

<資料>

日本語学習ソフトの評価

● 回答者情報

氏名		年齢	
性別		出身国	
母語		日本語学習暦	合計 ____年 ____か月

● 学習ソフト名

名称	
URL	

● 評価のしかた

各学習ソフトについての意見を、次の基準に従い、「回答」欄の「5 4 3 2 1」の数字にそれぞれ○印をつけて下さい。

番号	質問	回答				
		そ	う	だ	←	
		----- →ちがう				

● 基準

- 「その通りだ（そくだ）と思う」場合は、5
- 「どちらかというとその通りだ（そくだ）と思う」場合は、4
- 「どちらともいえない」場合は、3
- 「どちらかというとそのは思わない（どちらかという、違うと思う）場合は、2
- 「そうではない（違う）と思う」場合は、1

* 質問内容を十分讀んだ上で、お答えください。

(1) グループ1

番号	質 問	回 答			
		そ →ちがう	う だ	← 3	- 2
1	学習レベルの設定は適切である	5	4	3	2
2	学習した内容がすぐ使える	5	4	3	2
3	内容構成にまとまりがある	5	4	3	2
4	文字の学習に役に立つ	5	4	3	2
5	日本語の学習の説明や提示は役に立つ	5	4	3	2
6	例文は役に立つ	5	4	3	2
7	聞く・話す・読む・書くの練習は役に立つ	5	4	3	2
8	文化と言語の両方が学習できる	5	4	3	2
9	学習資料がたくさんある	5	4	3	2
10	日本語学習に特定されている	5	4	3	2
11	学習に必要な時間が示されている	5	4	3	2
12	学習目標に合っている内容である	5	4	3	2
13	学習内容は適切である	5	4	3	2
14	学習方法は適切である	5	4	3	2
15	操作説明は適切である	5	4	3	2
16	学習しやすいような構成である	5	4	3	2
17	自分にいい影響を与える	5	4	3	2
18	自分に必要な部分を選択して学習できる	5	4	3	2
19	学習を中断しても、中断したところから学習が再開できる	5	4	3	2
20	自分で学習進度がコントロールできる	5	4	3	2
21	他の画面や他の機能への移動が自由にできる	5	4	3	2
22	メニューの利用が容易である	5	4	3	2
23	学習意欲がわく	5	4	3	2

番号	質 問	そ →ちがう	回 う だ	答 ← -
24	学習動機を起こさせる	5	4	3 2
25	学習中に不安感がない	5	4	3 2
26	別の内容でこのような学習ソフトがあれば、勉強したい	5	4	3 2
27	全体が把握しにくい	5	4	3 2
28	無駄なものが多く含まれている	5	4	3 2

(2) グループ 2

番号	質 問	そ →ちがう	回 う だ	答 ← -
1	全体的におもしろい	5	4	3 2
2	日本語学習を楽しくしている要素が入っている	5	4	3 2
3	親しみやすい内容になっている	5	4	3 2
4	美的感覚のある画面である	5	4	3 2
5	なじみやすい学習のしかたである	5	4	3 2
6	興味を持たせる内容である	5	4	3 2
7	動く映像を活用している	5	4	3 2
8	ゲーム性がある	5	4	3 2
9	全体的にストーリー性がある	5	4	3 2
10	学習中に退屈さを感じる	5	4	3 2
11	内容は全体的に堅い感じがする	5	4	3 2

(3) グループ 3

番号	質問	そ →ちがう	回 う	答 だ	←	-
1	問題解決をしていく中で、解決能力が養われる	5	4	3	2	1
2	自分が学習している内容と関連がある	5	4	3	2	1
3	参加しているという意識が持てる	5	4	3	2	1
4	誤答に対する訂正は適切である	5	4	3	2	1
5	正解に対する反応は適切である	5	4	3	2	1
6	正誤判定・評価などがある	5	4	3	2	1
7	漢字の読み方がふりがなとして適切に示されている	5	4	3	2	1
8	文字の表記法は適切である	5	4	3	2	1
9	音聲による学習ができる	5	4	3	2	1
10	母語で読むことができる	5	4	3	2	1

(4) グループ 4

番号	質問	そ →ちがう	回 う	答 だ	←	-
1	学習のやりかたが簡単である	5	4	3	2	1
2	選択ボタンの使い方は簡単である	5	4	3	2	1
3	使いやすい	5	4	3	2	1
4	記号や用語がわかりやすい	5	4	3	2	1
5	文字のサイズや色が適切で読みやすい	5	4	3	2	1
6	画面の構成が見やすい	5	4	3	2	1
7	画質が適切である	5	4	3	2	1
8	音質が適切である	5	4	3	2	1
9	指示や説明がわかりやすい	5	4	3	2	1
10	自分がどの部分を学習しているかがわかりやすい	5	4	3	2	1
11	プログラムが突然止まるなどの誤作動がない	5	4	3	2	1

(6) 自由記述

- ① 短所は何ですか。
- ② 長所は何ですか。
- ③ その他の意見があれば、書いてください。

* お疲れ様でした。

要 旨

日本語教育において学習ソフト（コースウェア）への関心が高まる中で、その品質や評価に関しては、多くの議論がなされているとはいいがたく、教師や学習者の主観的な判断により、「教材」が選択されているのが実情であることから、日本語教育用のコースウェアの開発や利用に当たって、評価の内容と方法に関する議論を深める必要があると考えた。

先行研究からCALLが学習者中心であるにも関わらず「学習者用評価項目」が充実していないことを指摘した上、「教育一般にまたがる評価の視点を持ちつつ、外国語教育の要素をどのように組み込むか、更に、日本語教育特有の問題をどのように評価項目に反映させるか」ということを検討課題とし、客観性の高い北神・井上(2000)を基本に日本語教育と外国語教育の要素を組み込んだ「学習者用評価項目」(評価用紙)を作成した。また、この評価用紙を用いて、韓国人日本語学習者を評価者として情報通信ネットワークで提供されている日本語CALL教材（コースウェア）の評価に関する調査を行い、得られたデータをもとに評価用紙の信頼性分析を行った。評価用紙は「内的整合性の高い」信頼性のある項目で構成されていることが確認できた。また、この評価用紙を用いた評価調査の結果をもとに分析および考察を行い、32の高評価学習サイトの特徴を抽出し、望ましい学習サイトの評価基準となることを示した。本研究の意義は、「日本語CALLコースウェアの望ましい学習者評価項目を作成」「望ましいコースウェアのあり方に関する検討」「学習者のコースウェアに対する期待の明確化」である。また、本研究で作成した評価項目を通してコースウェアの特徴を判断する資料となり得ることを示した。今後の課題としては、本研究で作成した評価項目をもとに「教師・研究者・開発者」の評価項目を作成し、より包括的な評価を行うことにした。

キーワード：日本語教育、日本語CALL、評価研究、ネットワーク、コースウェア、
学習者評価

투 고 : 2005. 11. 30

1차 심사 : 2005. 12. 10

2차 심사 : 2005. 12. 31

住 所 : (739-0046) 日本廣島縣東廣島市西條西本町28-6サンスクエア東廣島810

電 話 : +81-90-1803-3406

e-mail : arosis76@yahoo.co.jp